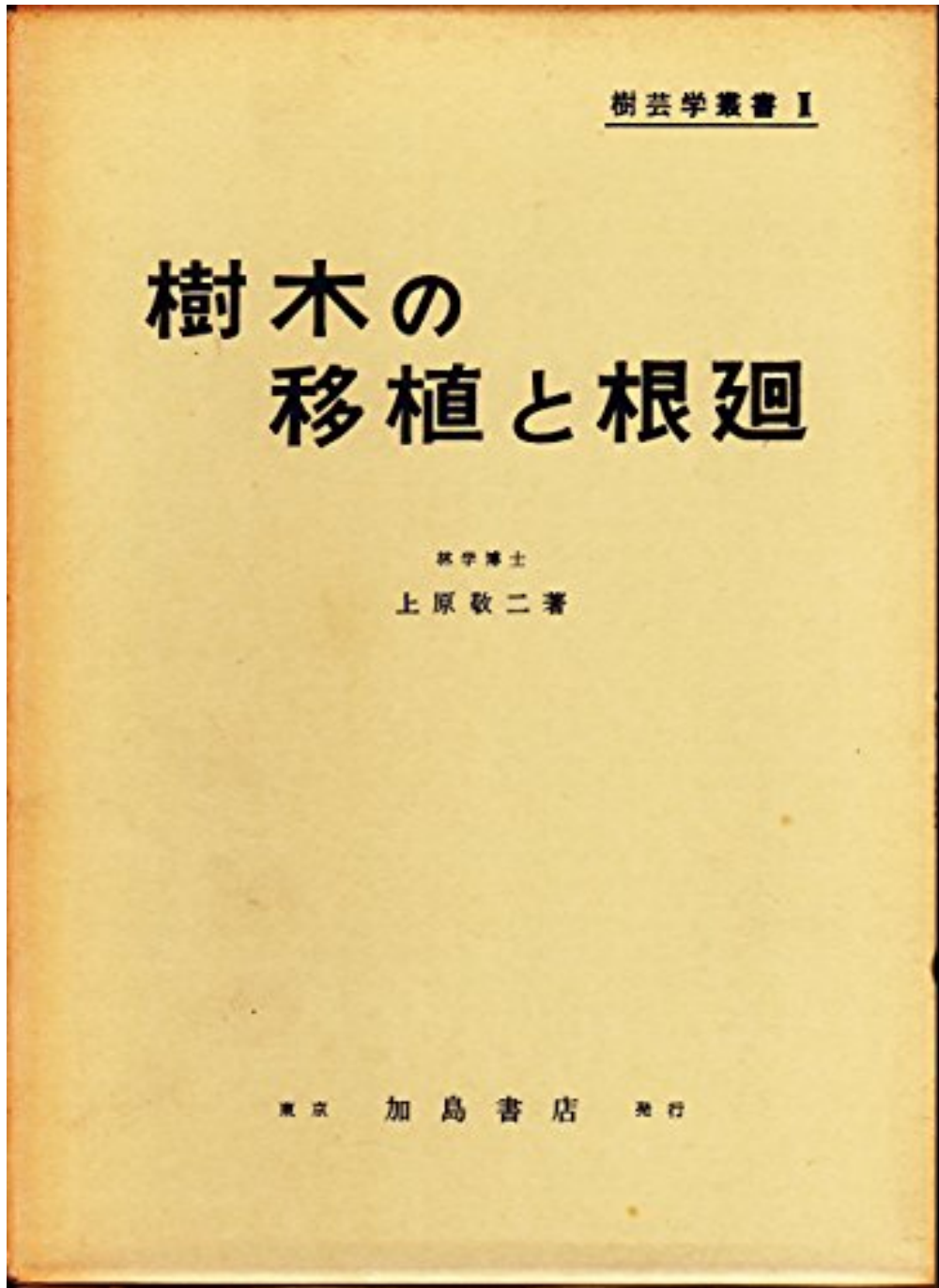


樹木の移植と根廻 (1961年) (樹芸学叢書 第2)



出版: 加島書店
著者: 上原 敬二
ページ: 253
PDF

本書「まえがき」より抜粋

ドイツの諺に「しばしば移される植物は茂らず」というのがある。これは人の生活にたとえ

た言葉であって頻繁に職場をかえるものに成功した例がないということを寓している。樹木にあっては度々移植すれば茂っているひまがないかわりに枯れることがないといえる。

移植は樹木にとってはあたかも人体の手術のようなものである。どのくらい樹木を消耗させるか、快復して再生の力を得るためにはどのくらい努力しているか、これを見破り、その生まれ出る悩みをいくらかでも軽くしてやるのが樹木に対する人の愛情というものである。

著者は現在までに大小はあるにしても樹木を移植、根廻したこと数万本に及んでいる。この体験から樹木の心を自分のこころとし、時に応じて樹木の生理的要求を叶えてやり、移植後の活着と、その後の生育を見守ってやったつもりでいる。樹種、気候、風土、土性、樹勢に即応した最も効果ある方法を考えるにいつも真剣な気持ちをもって接して来たのである。それでも相当数を枯らしている、生命あるものを枯死させたときはたまらない愛惜の情にかられる。

(中略)以上の諸項を勘案して本書の内容を定めた、移植と言ってもそれは植栽、配植、保護その他の樹芸分野に大きな関連性をもつもの、それらについては本叢書の他の諸編を参照されたい。現在移植について記述した書物が殆どないと思われるので本書が造園上そうした分野に関連される諸賢の指針となりうれば著者の本懐とするところである。

<https://k2s.cc/file/08cce65960754/j4r6oVxuJ.pdf.rar>